



女性の比較史料学

— 藤原辰史著『ナチスのキッチン—「食べること」の環境史』を読む —

村山 聡

香川大学

1. 働く時間・楽しみ休む時間・寝る時間

日本において、24時間という限られた1日を設定する現在のような時刻制度を用いるようになったのは、1872年（明治5年）11月1日付け太政官布告からである。『太陽暦』（グレゴリオ暦）に基づき、1年は365日、1日は24時間、何時何分という時刻表示による“定時法”になったからである。江戸時代の時刻制度では、『太陽太陰暦』つまり月の動きに合わせて1カ月の長さを29日と30日とに決め、1年＝12ヶ月分の長さを実際の太陽の周期との誤差を調整するため、約3年に一度「閏月（うるうづき）」を設けて1年を13ヶ月とする暦に基づき、太陽の出ている時間が昼で、太陽が沈めば夜とし、昼夜をそれぞれ6等分していた。これを一刻（いっとき）として時間を計る「不定時法」であった。不定時方では、夏の昼間より、冬の昼間は短くなりその間隔が変化する。夏至の頃の昼の一刻（いっとき）が約2時間40分あるのに対し、冬至の頃では約1時間50分しかない。

なぜこのような話から始めるかというと、歴史研究が取り扱ってきた1日の時間あるいは一生の時間というのは、一様ではないからである。働いている時間を主に扱っているのが経済史研究であるし、多様な社会史研究では、楽しんでいる時間や休んでいる時間も考慮に入れる場合もあるが、寝ている時間を重視している歴史研究はほとんどないかもしれないからである。およそ人生の3分の1は寝ている時間なのであるが、長い冬の夜と短い冬の夜を有した日本と長い長い冬の夜が大半を占めるヨーロッパやさらに白夜のような時間を有する北欧など、寝ている時間も実は地球上で多様である。

「キッチン」という空間に着目した優れた著作である藤原辰史著『ナチスのキッチン—「食べること」の環境史』（水声社、2012年）を読み進むうちに気づかされたのは、長い人間の歴史の中での「現代」という時代の特異性を明らかにする必要性と共に歴史研究が対象としてきた時間の貧困さであった。多くの歴史研究が扱ってきたのは人生の3分の1に満たないかもしれない。第1回河合隼雄学芸賞受賞に際して、本書は「食事の場が、政治と経済の主戦場になっていくプロセスを、現代の食の風景の原型として描き出している。自然と人間のちょうつがいの場所に関心を持ち続けた河合隼雄が、論じるべくして論じなかった分野での冒険的な一作」と紹介され（<http://www.kawaihayao.jp/pdf/>

Females in Historical Sources.

A Book Review: Tatsushi Fujihara, Kitchen of Nazis. Environmental History of Foods.

kawaihayao_news_130520_re.pdf)、実に多岐にわたる論点が巧みに盛り込まれた本書でさえも、限られた時間しか取り扱われてはいない。もちろん、すべての時間を1冊の著作で取り扱うなどということはとてもできるものではないし、そのような要求をすることすら無茶な話であろう。

ただ、歴史家はどの時間を扱っているのかという点について、常に明らかにしておく責務があろう。藤原が『ナチスのキッチン』において、「キッチン」という独特の時空間に着目したことは、改めて歴史家が取り扱う時間の多様性を想起させる。驚くべきほどに多様な想像力を掻き立てる著作であることに疑いの余地はない。

2. プライヴァシーの誕生と多様な居住空間

現象学系の地理学者であるイーファー・トゥアンの著作に『個人空間の誕生－食卓・家屋・劇場・世界』（せりか書房、1993年、原書1982年）がある。原書のタイトルは *Segmented Worlds and Self. Group Life and Individual Consciousness* である。当時の歴史研究の成果が組み込まれた著作である。

トゥアンの著作ではいくつかの近代以前のいくつかのエピソードが紹介されている。たとえば、ルイ14世は、22歳の若い男性であった当時も、寝室を乳母と共有していたようであり、また、威厳に満ちた中年になっても、この太陽王は、毎朝8時15分に王を起すことが仕事である第1従者と寝室を共有していたらしい（トゥアン、同書、106頁）。17世紀の終わりまで、部屋は相互につながっており、プライバシーの確保は不可能であり、困難なものであった。トゥアンは、フィリップ・アリエス（『＜子供＞の誕生－アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房、1980年、原書1965年）を引用して「他の部屋へ行くのに、何組かの夫婦や一群の少年少女たち（主人のそば近くで眠らなければならない者も含め、召使たちを数に入れなくて）が休んでいる部屋を通り抜けなければならない間取りになっていて、食事をとり、友人や客をもてなし、時には乞食に施し物を配るために人々が集まる、一人きりになれないこうした部屋の」混住状態を紹介している（トゥアン、同書、106～107頁）。

ただ、トゥアンも述べるように、当時のヨーロッパ社会は一律ではない。「イングランドではより大きなプライバシーを求めており、それが、部屋の数を増やし、その用途を制限したことにはっきり示されている」という（トゥアン、同書、107頁）。17世紀後半には、イングランドの貴族生活はフランス式に近づいたようである。ただ、ニューイングランドに移住したイースト・アングリアやイングランド南東部の出身者たちは、複数の部屋を持つ住居に住むという伝統を引き継いでいたという。家族の結びつきを重視するピューリタンたちは独自の間取りを生み出していたことも十分に考えられる。

住居のあり方は実に複雑な歴史を辿っていると思われる。イングランド型とかフランス型というような紋切り型の類型論はあまり意味がない。自然条件や労働条件にも左右されるし、とりわけ、自然との協働が重要となる近世社会においては、自然と社会の相互関係に伴う労働のあり方にも大きく居住形態は左右されることになる。それに対して、現実の経済から離れた貴族層や牧師層の居住形態はまた別の文脈でその構成が組み立てられることになるであろう。つまり、何が居住形態を決定する要因となるかは、より自然の影響を受けやすいほどに歴史的に多様でありうるものであり、むしろ、その多様性を単一化する論理や理念に着目する必要がある。強烈なナショナリズムやテラー主義のような強烈な効率主義など、緩やかな日常の乱雑さや煩雑さを制止するようなメカニズムが近現代には存在するということであろう。

トゥアンの著作は邦訳では『個人空間の誕生－食卓・家屋・劇場・世界』であるが、原書のタイトルは直訳すれば『分節化された諸世界－集団生活と個の意識』である。プライヴァシーやプライヴェートな空間の誕生という歴史的变化も取り扱われているが、ヨーロッパ近代の誕生の重要な論点として、世界が分節化されるプロセスを集団生活の諸相と自己の意識との関係で、現象学的に論じているのがトゥアンの著作である。さらに、地理学的な現象学者であるトゥアンは、居住空間や劇場空間などを検討対象とする際に、位置的な問題に焦点を当てている。もっとも、彼の著作は1982年の作品であり、その当時の歴史研究の成果しか取り入れられていない限界がもちろんある。たとえば、次に触れることになる近世ヨーロッパの特定の地域でとりわけ多く残されている遺産目録の分析などは1980年代半ば以降になされてきたからである。この遺産目録の分析などからは、相続のあり方や家財道具など、具体的な女性の所有物の詳細を知ることができる。

3. 多様な時空間と歴史資料のなかの女性

前項でトゥアンの著作の一部を紹介したが、この文脈をさらに『ナチスのキッチン』で検証してみよう。その際、アプローチの方法として採用するのは比較史料学である。歴史資料から得られる情報には二種類の異なった情報がある。一つは、ある一定の問題設定の下で歴史資料から抽出される情報であり、もう一つは、歴史資料の存在そのものから得られる情報である。前者が一般的であり、後者の方法を筆者は特に比較史料学的アプローチと呼んでいる。この双方向からのアプローチに基づき、「女性」は歴史資料においていかに取り上げられてきたのか、「歴史のなかの人間の位置づけを根本から問い直すことから始める環境史に挑戦する」（藤原、同書、428頁）藤原の『ナチスのキッチン』を題材に、以下の二つの論点から考えてみたい。

（1）台所の誕生と血の世界

人類の長い歴史からみた時、藤原の描く「台所」は、もしかすると、時空間としては局所的な現象ではないか。「台所の歴史は、その熱、煙、煤を居住空間から遮断する歴史であった」（藤原、同書、365頁）とあるが、「料理の機能だけが独立する」台所（藤原、同書、366頁ほか）が登場するには実に長い時間を要しており、また、非常に限られた近代に特有の現象なのであろう。特に肉食社会のヨーロッパを観察する場合、屠殺の現場から目をそらすわけにはいかない。しかし、この問題は「女性の比較史料学」というここで掲げたテーマとは別の次元にあるかのようである。それはなぜか。目の前の動物を殺さなくても肉を食べることができる状態がなぜ生まれたのか？

ドイツ語のWirtは、「家の主人」と訳すことができる（藤原、同書、182頁）が、Wirtinとすれば、「女主人」となる。Schneider（仕立て屋）も、女性形のSchneiderinがある。ところが、Metzger（肉屋）というのは男性形しか聞いたことがないように思うが、Metzgerinがないわけではない。また、Schmiede（鍛冶屋）は女性形であり、それは鍛冶場を意味していると考えた方がいい。schmiedenという鍛錬する、鍛造するという意味が名詞化したと考えられるように思う。metzgenという動詞つまり「屠殺する」という言葉は、今でも主に南ドイツやスイスで用いられるようであるが、北ドイツでは、主に、schlachten（畜殺する、虐殺する）から来るSchlächterという肉屋という言葉が使われるようだ。こちら、Schlächterinという女性形もあるがあまり聞いたことはない。単語としては女性形があっても、租税台帳などで女性がそのような職についている例は近世では稀なように思う。いずれにしてもこのような屠殺から派生する職業名ではなく、肉を扱う業者としてFleischer（肉屋）というドイツ語ももちろん存在する。これらがどのような時代にどのように分類していたかを調べることも可能だと思うが、手元に十分なデータはない。

しかし、肉屋の農場が血にまみれたものであっても、それを忌み嫌う感覚はヨーロッパにはないように思う。豚は細部まで活用され、血のソーセージも作られる。それは農家では普通である。知にまみれた職業と被差別とが結びつくのは動物の血を嫌う文化だけかもしれない。

問題はそれよりも家庭内の暴力的行為あるいは社会規範による暴力を防ぐ可能性を持った裁判制度が存在するか否かであろう。近世ドイツのヴェルテンベルクの女性の権利の詳細を明らかにしてきたケンブリッジ大学の経済史家であるシーラ・オジルビー（Sheilagh Ogilvie）は、分割相続地域で女性の所有権が保証されているようなところであっても、家の管理規範は男性にあったことを証明している。オジルビーの主著である *A Bitter Living. Women, Markets, and Social Capital in Early Modern Germany* (New York: Oxford University Press, 2003) で中核にしている史料は、ドイツ・ヴェルテンベルクの教会会議議事録である。プロテスタントの教会会議は、キリスト者としての生活を守ることを目的に様々な裁定を下している。複数の村落や都市を含む地域の教会共同体の代表者からなる教会会議のメンバーは、地元の選挙で選出されている場合が多い。オジルビーは17世紀中葉

Females in Historical Sources.

から1800年に至るまでのおよそ150年間に残された7,000頁の議事録のすべてを整理して議論を展開している (Ogilvie, pp.22-36)。

先に、肉屋に触れたこともあり、肉屋の妻が登場するところを見てみよう。工業化以前のヨーロッパ社会では、婚姻した女性は法的な成人として扱われない (以下は、Ogilvie, 186-187)。これはヴェルテンベルクだけでなくヨーロッパ各地で同様である。法的に彼女の代理となるのは、Kriegsvogt (直訳すれば、紛争代官) と呼ばれた成人男子であり、彼が彼女の法廷な代理人になる。この代理人制度には利点も欠点もあるが、研究者によってその評価は分かれる。ディビッド・セービアンは、夫に対して妻を守る役割ができると積極的に評価しているが、オジルビーの指摘によれば、共同体代表は、夫を自分の妻の紛争代官として認めていた。あるいは、暴力から身を守ろうとする女性が紛争代官を任命しようとして拒否されている事例がある。1708年のヴィルトベルク (Wildberg) の事例では、産褥の妻の元に来た夫は彼女に医者への支払いを強要したという。というのも、彼は、妻が紛争代官を探しており、子どものための後見人も探していると聞きつけたからである。彼は、彼女が婚姻に際し持参した農場である血に染まった農場 (this bloody farm) から彼女があまりお金が行かないようにし、さらに糸紡ぎでなんとか生計を立てさせるようにしていたという。しかし、彼女は紛争代理を立てることはできなかった。共同体への申し出が逆効果の場合も多かったようである。しかしそれでも、そのような状態を知りうる社会であったこと、また、そのような事実を記録する社会であったこと、また、女性が権利を主張する社会であったことは重要である。

(2) 台所という空間と資本の問題

家という単位が所有権の総体であるという点も検討する余地がある。遺産目録の詳細が検討されるようになり、女性の所有状況を詳しく知ることができるようになった。近世の食に関わる所有権の実体と『ナチスのキッチン』で描かれた世界とを比較した時、決定的な違いは、台所を構成する要素である台所用具などが、次第に資本主義化していく過程にあったということである。藤原が正しく指摘しているように、「歴史の変遷のスピードは政治の変化のスピードほど速くは」なく、食べ物にせよ、台所用具にせよ、ヒトラーの首相時代12年間で、台所の風景が一変したわけではない。「劇的な変化は、西ドイツにせよ、東ドイツにせよ、・・・、現在の食文化の原型ができあがった1960年代から1970年代に求められる」 (藤原、同書、376頁)。藤原は、外食産業の急速な発達や冷蔵・冷凍技術の進歩が台所の様相を大きく変えたと指摘しているが、後に詳しく述べるブローデルの三層構造を念頭に、その変化を評価するならば、台所が普遍的な市場の世界から資本市場に翻弄される世界へと重心を移動したことが重要である。システムキッチンの普及の基盤が上下水道、ガス、電気などのインフラストラクチャの整備状況に関わる限り、国家主導あるいは大企業主導にせよ、台所が資本の論理に巻き込まれる過程が反映している。

Females in Historical Sources.

A Book Review: Tatsushi Fujihara, Kitchen of Nazis. Environmental History of Foods.



(注) 写真はすべて村山撮影 (2009年12月25～29日、羊飼いの母村ルムジャタル・標高1,300mほか)
参考文献：渡辺和之『羊飼いの民族誌 ―ネパール移牧社会の資源利用と社会関係』(明石書店、2009年)



ネパールで水牛の食肉市場が屠殺場を兼ねていた風景はそのような資本主義的な食文化とは好対照であることは明らかである。血と糞尿と共に生きる世界を資本主義的食文化は駆逐したのである。ネパールの山村を血と糞尿にまぎれた世界などと呼ぶことはとてつもなく失礼である。人間の生と死を直視している世界は、独自の清潔で健康的な住環

Females in Historical Sources.

A Book Review: Tatsushi Fujihara, Kitchen of Nazis. Environmental History of Foods.



境を生み出していることも事実だからである。このような世界では、カトマンズのような大都市の方が常態化している渋滞と氾濫しつづけるゴミに追われるゴミ箱状態となっている。

ネパールの家の中でも女性たちが取り仕切っているように、近世ドイツのヴェルテン

Females in Historical Sources.

A Book Review: Tatsushi Fujihara, Kitchen of Nazis. Environmental History of Foods.



ベルクにおいても、女性たちが自分の仕事場として、種々の決定権を有していた。藤原も紹介している家父の書では、「家父、家母、子ども、祖父、祖母、おじ、おば、奉公人、徒弟が『生業』を営みつつ『家族』として存在していた近世の家の形態を『全き家』」（藤原、同書、42頁）と呼んでいるが、「この大所帯の家族形態では、調理場を兼ねた



暖炉が家の中心にあり、そのそばに座る家母が家政を取り仕切る権力者であった」。

「家母は主婦ではない。血縁ではない同居人もその管轄下にある。夫は公共空間で言論および経済活動を行ない、妻は私的空間で家族の情愛を育み、家事労働を女中に任せるといった分業を生み出した、いわゆる『家父長制』が、近代市民社会の産物である以上、

Females in Historical Sources.

A Book Review: Tatsushi Fujihara, Kitchen of Nazis. Environmental History of Foods.



それ以前から連綿と続いてきた『全き家』の家母の権威を過小評価することはできない」（藤原、同所）と家父の書を紹介している。この家父の書は、同時代人の処世訓であり、現実の家族のあり方を反映してはいない。つまり、当時の家族観を表明している書物であり、家族史のレベルでは理念の歴史に対応している。



そのため、この内容を正確に理解するためには注意が必要である。第一に近代以前の家族は自然条件に左右される労働形態が主流であるため、特に農家族の形態は多様であり、むしろ、近代化の過程において、単一化していったと考えるべきである。第二に、それと関連して、家父の書のような処世訓を示している資料は家族の実態を反映しているというよりも、家族のあるべき姿と考えるものを叙述しているものであり、家族の現実史

Females in Historical Sources.

A Book Review: Tatsushi Fujihara, Kitchen of Nazis. Environmental History of Foods.



とは別の文脈で捉える必要がある。さらに、第三に、日本の明治以前の家システムとは異なり、家族関係においてもヨーロッパは聖俗両界から法的な拘束を受けており、藤原も引用しているヴェストファーレンの地方法律顧問のユストゥス・メーザーの『オスナブリュック官報』（1767年）に掲載されているニーダーザクセンの大世帯家族における家母

の役割についての描写（藤原、同書、43頁）についても、イデオロギー色の強い叙述であると考えられる。家族を歴史的に形成される現象としてみる家族史研究が登場するのは1960年代のことであり、それまでの家族に関する叙述は多かれ少なかれ検証しうる実証的基盤を有していないことが多い。このような存在しない古き良き時代を夢想する視角は「反啓蒙主義的な保守主義者である」ヴィルヘルム・ハインリッヒ・リールで頂点に達する。



家族史研究は多くの神話を破壊してきた。1964年にE・A・リグリィと共に結成した「人口史・社会構造史にかんするケンブリッジ・グループ」を代表するピーター・ラスレットは、斎藤修の呼びかけに応じて『家族と人口の歴史人口学—ケンブリッジ・グループの成果』（斎藤修編著、リプロポート、1988年）に新稿「日本からみたヨーロッパの世帯とその歴史」（同書、23～56頁。この論文は、後に、ピーター・ラスレット著『ヨーロッパの伝統的家族と世帯』（リプロポート、1992年）に再録されている。）という論文を寄稿している。19世紀の著述家の作品以来信じられてきた様々神話がいかに打破されてきたかを明確に示している論文である。しかし、その後の歴史人口学研究や家族史研究においても、未確定な問題も多い。さらに、環境史研究の視点は、下記の神話に対してさらなる検討が要請されている。

ラスレットは、世帯概念ならびに世帯の人口学的分析の結果として、過去の家族に関する固定観念となっている五つのドグマ（＝教条的定説）を検証する。第一のドグマは大規模世帯ドグマであり、ヨーロッパおよび他のおそらくすべての地域においてすらも、工

Females in Historical Sources.

A Book Review: Tatsushi Fujihara, Kitchen of Nazis. Environmental History of Foods.

業化以前の過去においては、同居家内集団はつねに大規模でありかつ親族構成は複雑であった、というものである。このドグマは実証研究において完全に打破された。特にイングランドでは、単婚小家族が長く支配的であったことが証明された。

第二は、そうした集団の規模と構造に時の経過とともに起こる変化が、いつでもどこでも常に大規模から小規模へ、複雑なものから単純なものへという変化であった、というものである。これを一方向ドグマとよんでいるが、世帯の複合性が減じるというよりも逆に増すというようなケースも発見された。

第三は、工業化あるいは「近代化」の過程が、いつでもどこでもこの一方向ドグマにそった変化をとまってきた、という誤った仮定であり、これを工業化ドグマとラスレットはよんでいるが、この過程は複雑である。さらに、本稿でも少し触れているが、「工業化」「産業革命」そのものが、決して、教科書的な理解ほどに単純な過程ではないことが、近世ヨーロッパの経済発展の詳細が明らかにされるにつれて、不透明なことが多くなっている。

また、第四は、さらに、証明されてもいないし不必要でもある仮定である。すなわち世界中のあらゆる地域において、また歴史のある一時点、つまり始源的状况では自然的世帯経済が一般的であった、という仮定である。こうした状況のもとでは、大規模で親族関係の入り組んだ世帯は独立の自給自足体として存在し、社会全体はそうしたものの集合体として存在した。そこには、労働市場も、資本も、また貨幣経済も存在しなかった。

ラスレットはこの仮定を自然的世帯経済ドグマとよんでいるが、環境史研究が深まりを示せば示すほど、Subsistence Economyを「自給自足経済」というように、発展段階論的に安易に理解してはほとんど何も語ることができない。自給自足経済というよりも、「生存経済」という訳語がより適切であると考えるが、人類の生存そのものを地域の自然資源とどのような関係で理解すれば良いかは、さらに探求されるべき課題となっている。

第五は、工業化以前においては、どんな世帯も人口再生産の単位であると同時に生産の単位であった、というあきらかに誤った仮定である。これを労働集団としての世帯ドグマとラスレットは命名しているが、これは、市場経済化という表現で近世の経済社会の発展を記述してきた経済史の見直しを迫る論点となる。フェルナン・ブローデルが1967年ならびに1979年に公にした著作である『物質文明・経済・資本主義 15～18世紀—日常性の構造—』（みすず書房、1985年、英訳1981年、原書1967年）そして『物質文明・経済・資本主義 15～18世紀—交換のはたらき—』（みすず書房、1988年、英訳1982年、原書1979年）で明らかにした三層構造図式を念頭におけば、ある程度、問題が整理できるはずなのだが、世帯の構造分析や歴史人口学的分析を実証的基盤とする研究においては、その議論は十分に深められてはいなかった。それは、家族の問題ではなく、市場と国家資本との関係が論点であったからである。

ブローデルの三層図式というのは、前近代社会において基層となるものが、「非-経済」「非-市場」領域、そしてその上に市場経済があり、最上階がブローデルの意味での「資本主義」の領域である。斎藤によれば、この図式の特徴は、（１）通常、市場経済として一括する中層と最上階を区別するところにある。（２）売り手と買い手との連鎖からなり自動調整機能をもった市場経済を進化の尺度とせず、三層構造のなかで最も普遍的なものとブローデルは捉えている。そして、（３）資本主義をたんなる市場原理以上の力が働く世界として捉えている点が独特である。近世の資本主義から現代の大企業体制に支配された資本主義まで、価格支配力がその領域では鍵と捉えている（斎藤修『比較経済発展論－歴史的アプローチ－』（岩波書店、2008年、2頁）。確かにこの三つの論点がブローデルの三層図式を的確に表現していると思う。しかし、資本の領域では、法制度や国家制度が否応なく影響を与えており、近世経済という枠組みでは理解できる事柄も、近現代への道筋のなかでは、（４）この資本の領域が国家権力と結びつき、さらに、ナチスの時代のように、場合によっては、国家権力が非-市場・経済の領域に土足で踏み込むことにより、複雑な歴史過程を生み出したと考えることはできないであろうか。これを斎藤の整理に加えて、第四の論点とすることができよう。

斎藤は的確に「徳川日本の場合、ブローデルの意味での資本主義はほぼ完全に欠如していた」といってよいのにたいして、近世西欧では、商業資本主義が経済成長の重要なエンジンの一つであり、農業でも資本主義的な体制が誕生していた」と指摘している（斎藤修「前近代成長の2つのパターン－徳川日本の比較史的位位置－」『社会経済史学』Vol.70, Nr.5 (2005), 3-23, 22）。農業資本主義が、「土地所有者による固定資本投下と土地および労働という生産要素市場の展開をその内容としたのにたいして、商業資本主義とは、価格体系の異なった地域間の交易から、それもしばしば経済外的な力を利用することによって利潤を獲得するという活動様式」（斎藤、同論文、同所）であった。西欧におけるこの二つの資本主義はかなり性格を異にするという斎藤の指摘であるが、さらに、近世から近代以降の変化に目を向けるとすると科学の知識や技術の発展が、資本領域と非-市場・経済の変化に決定的な影響を与えるようになる。

おわりに

このブローデルの三層図式の特徴として、以上のように、市場の領域と資本の領域を区別する論点があるが、これは藤原の『ナチスのキッチン』をさらに深く読み解く場合にも有効であると考えられる。つまり、市場の領域の普遍性は市場の自動調整メカニズムの議論で片付けることができるが、資本の領域と非-市場・経済の領域は、市場メカニズムとは別の文脈を考える必要があることを明確にするからである。家族の領域や「台所」は、三

つの領域のすべてに関わるとしても、歴史過程のダイナミズムは一つ一つの構成要素によって異なってくると考えられる。たとえば、紅茶の普及、砂糖の普及などは、資本の領域とも深く関わるし、上下水道や電気・ガスなどの新たなインフラストラクチャの整備が必要となるようなシステムキッチン、より「国家事業としての資本」の影響力が大きくなる。さらにそこでは、本来、非-経済の領域である家族の人間関係が家族イデオロギーとして社会統制の対象となると、非-経済も国家権力による管理下に置かれることになる。ナチスという特殊な矛盾に満ちた時代のその矛盾が国家権力による非-市場・経済領域への侵略という最もおぞましい国家権力のモンスターと化したのであろう。いずれにしても、ナチ期の女性たちがいかに矛盾の渦の中にいたことがよく分かる好著であった。

「女性の比較史料学」は未完である。少なくとも、多くの見過ごしに来た論点があることを藤原の著作は自覚させてくれた以上、その責務を引き受けるのは筆者を含めて、多様な読者であると確信する。